

六 シヤロンの歡聲くわんせい

つぎぐと齎もたらされる戰捷せんせうの知らせに刺戟されて、自ら陣頭に

馬首ばしゅを向けらるべく、シノンを發はつしたシヤルルの一隊は、ジャンヌ

が或あるひは書を送つて歸順きじゆんをすゝめ、或は戰つて城門を開かせた市々まちぐを

通つて、マルネ河畔かはんのシヤロンにその王旗おうきを翻ひるがへして居りました。

今日けふしもシヤルルは、こゝまで伴ともなつて來たアニエ・ゾレエの手を

取つて、行在所あんざいしよの園をそこそのと逍遙さまようて居られましたが、ブルゴ
ンデイの騎士の一人が歸順きじゆんの報告をもつて拝謁はいえつを待つてゐるとい
ふ、新しい喜びを扈從こじうの者から耳にしました。シャルルの喜悅よろこびは此
上うへもなく見えました。すぐにお居間ゐまにかへられてその騎士を引見いんけんさ
れました。

『ほんとうに、ブルゴンデイ公には、朕ちんに服從ふくじうすると言はれたのか。』
『このシャロンの市まちにて、わが公爵には陛下はいえつに拝謁はいえついたされますで
ござりませう。そのことを前もつて申上げるやう、私おほに仰せつけら
れましてござります。もう間もなくお見えになることゝ存じます
る。』

『おゝアニエ・ゾレエよ、なんといふ美^{うる}はしい日だらう！ 楽しい平和はかへつて來た！』

『公爵には二百の騎士を從へて、陛下の足許に跪^{ひざまづ}くであらうと申されましてござります。けれども、陛下に置かせられましても、それをば敢^{あへ}てなされず、御連枝^{ごれんし}のお挨拶^{あいさつ}をもつてお待遇^{たいぐう}あることゝ、心密^{こゝろひそ}かに期して居られる様子でござりまする。』

『朕^あは早く會^あひたう思ふぞ。』

『また、今日の會見^{くわいけん}には、過ぎ去つたことゝもは一切お話しのないやうにと、望まれてござりまする。』

『どうして朕が、そのやうな過去の苦しい思ひ出を好まうか！』

『又、公爵のために戦ひました者どもは、残らず大赦の數に洩れぬやうにと願はれましてござりまする。』

『さうすれば、舊に倍する國民を朕は持つであらうぞ。』

『もしまた女皇イサボオ様が、この講和にお賛成でございましたならば、同じく平和を結ばせられるやう、申されましてござりまする。』

『言はるゝまでもないこと、もとより女皇から仕向けられた戦であれば、その御心次第によつて、好ましからぬ戦も止むであらうわ。』

『こゝなる十二人の騎士達、陛下の綸言の證人たられよ。』

『朕が言葉は神聖であるぞ。もし朕が親しい握手にその心が背くものであるならば、その罪のために、朕が將來の幸福は害はれるであらう。これより外に、どのやうな保證を公爵には望まれるか。』

ブルゴンデイの騎士は、此時シャルルの傍に侍して居たヅ・シャッテルに目を指して言ひました。

『陛下、そこにわが公爵の父御を刺された方が居られるやうでござりまするが、再びその怨みを新しくして、今日の目出たい會見の妨げとなりませぬやう……………。』

その言葉も待たず、ヅ・シャッテルは無言のまゝその座をはづさうと、つと起ち上りました。

『おゝヅ・シヤッテル、身を退きやるか、公爵がお前に逢はうと言はれるまで、暫く遠慮して貰はうか。だがあゝ眞實なる朕が友よ！』とシヤルルは氣の毒さうにヅ・シヤッテルの後姿を見送るのでした。それは、その昔シヤルルの與黨と、ブルゴンデイ派とが不和であった頃の出来ごとなのでございました。

シヤロンの街に殷々として鐘は鳴り出しました。それは、今日新しく結ばれたところの、佛蘭西國とブルゴンデイ公との講和を知らすための鐘の音でございました。遙かに喇叭ラッパの音が聞えてきました。『おゝ聞け、あの喇叭を、朕は身うちがぞく／＼するわ！　こりやヂュノア、お前は百騎を従へて、はやく出迎の用意をせい、また軍

隊はみんな桂かつらの枝で飾るやうに。』

『陛下、公爵様はもうお見えでござりまする。』と、大僧正は窓に倚よつて表おもての方を眺めながら申しました、『あれ／＼澤山たくさんな群衆が、公爵様の乗馬に近づいて、おみ足に接吻せつぶんし、あれまたお召めし外套さかにつり下さがつたりして、なか／＼お歩きなさるのが困難くわんなんのやうに見うけられまする。』

『おゝ善良な國民よ！あの公爵の爲にどれだけ多くの生命いのちが失はれたか知れないのに、憎にくみも怨うらみも、この平和たいへいの爲に忘れてくれるか。アニエ・ゾレエよ、御身おんみは言葉ことばをよう／＼謹つつしまれよ、あまりにきつい嬉うれしさのために、公爵が胸むねに刺とげある薔薇ばらとなるやうな、我を忘

れた言葉をいやるな。』

善良な王のシャルルは、從兄弟いとこを迎へる喜びにおろくとして、
さも待遠まちどほしさうにみえました。

『陛下、公爵様のお入りでござりまする。』

シャルルはつと起たち上ありました。この時入口いりぐちに浮き出たやうに現
はれたブルゴンディ公は、澤山な騎士や武官の中から、つかくと
進み出てシャルルの前に跪ひざまつかうとしました。シャルルは公爵を抱いだき
ました。

『おゝ朕ちんが從兄弟よ！』

『陛下、今こそ私わたくしは正しい義務にかへりましてござりまする！』

街の鐘は猶も鳴りしきりました。この媾和を祝ふ市民の喜びは、

なんとなく賑はしい通街とほりのけはひに知られました。

公爵はまたアニエ・ゾレエをも抱いだいてその額ひたひに親しみの接吻せつぶんをしました。

『噂うはさに聞わけば、私わたしを討うつ武器ぶきを造つくらうために、あなたの寶たからをみんな棄すてさせられたさうな、その淨きよいお心を尊たつとび申まうします。その戦いくさひも争あらそひも、今は昔の物語も同然、失はれたものはみな、もとの通りにかへるのでござります。あなたの寶たからもまた、再びもとの持主にかへる時が來たのでござります。さあこれを平和の記念として、こゝろよくこれを受けて給はれ。』と、公爵は從者じゅうしやから受取つた小筐こばこ

を贈らうとしました。

シャルルは、アニエ・ゾレエが躊躇^{ためら}つて居るのを見られて、『心づくしの贈りもの、はやく受けたがよい。それこそは誠實な愛のため、または恢復^{くわいふく}された友情のたため、二倍の價^{あたひ}がありませうぞ。』

公爵はまた、胸に挿^さしてゐた美しい白薔薇の花を、アニエ・ゾレエの髪^{かみ}に結びつけました。

『おゝこの崇高^{けだか}さ、何故^{なぜ}これが佛蘭西の王冠ではござりませぬか！』
と、その頭^{かしら}を眺めながらアニエ・ゾレエの手を取り、『あなたにもし友^{いりよう}がお入用ならば、私もその數^{かず}に洩れませぬやう！』

美しい感動が、並居る人達の胸に流れました。至情^{しじやう}の美しさに洗

はれる血の音が、人々の胸から聞えはしないかと思はれるほど、尊い瞬間の沈黙でございました。

『何故私は、陛下を憎みまゐらせたでござりませう？ 何故あの英人を王位につけ、異國人に忠義を盟ひ、眞實の主君を苦しめたのでござりませう？——』

悪夢より覺めたやうなブルゴンディ公には、何も彼も過ぎ去つたことどもが悔恨となるのでございました。『實もつて、陛下に刃向ひいたしました頃の、心の中の苦しかったことは——。』

『公爵、もう何事も忘れられよ、何も彼も朕が運命ぢやつたわ。』

『その運命をよく導き、陛下がすべての悲しみを覗き、一度失はせ

られた領土の、村の一つも残さぬやうに、必と力を盡つくします。これから後は、たとひ地獄の力だとして、我等が友誼いうぎを引裂くことは出来ぬでござりませう。尊い神のみ胸むねこそ、過失あやまちを悟つたこの公爵のほんとの住家すみかでござりまする。』

和睦の盟は固く見えました。それは佛蘭西人の誰でもにとつて、此上このうへもない心強さでございました。何故なぜといふのに、ブルゴンディ公の協力を離れては、英國はその力の大半を失ふのでありましたから、それにつけても、ジャンヌの盡つくした力の大きさが、また更に人々を感激させるのでございました。

大僧正は此時このときゆるやかな歩みを二人の間に運びながら、『今日

といの

こゝに目出たく調はせられた和睦によつて、佛蘭西國は一層若やぎ榮えることとでござりませう。これまでみ國が受けた傷とても、間もなく癒やされることと信じます。兵火のために荒れはてた市々や村々も、新しい喜びにつつまれて、もとのやうに楽しく榮える日にあふでござりませう。とは申しまして、貴方々のために流された苦しい涙は、永久に乾くことがござりませなんだ。み代は今から幾久しく榮えても行きませうが、この悲惨なありさまを常に思ひ出されなければなりませぬ。子孫がどのやうな喜びも、刃の錆と消えうせた父祖の生命を還すことは出来ぬのでござりまする。それも何故といへば、みんな貴方々の不和の結果でござりまするほどに、此度の

へいくわ

まちく

あなたがた

よ

やいば

なにゆゑ

あなたがた

こんど

ことに省^{かへり}みて、よく／＼以後はお謹み遊ばせ。再びそのやうなことがござりましたならば、神は二度と再び^{すく}み救ひを垂れ給はぬでござりませう。』

『おゝそれ／＼、佛蘭西の救世主^{すくひぬし}は何故こゝに見えませぬ？』

人々はこの喜びの席に、更に新しくジャンヌを見ようと希望しました。

その希望に添^そうて、折^{おり}よくこゝに來かゝつたジャンヌは、今日も鎧に身を固めて、冒すことの出來ぬ威嚴^{みげん}をその顔に保つて居りましたが、輝く兜の上には、緑の色うるはしい桂の花冠^{くわくわん}を戴^{いた}いて居るの
でございました。その美しい額^{うるは}の上に平和の光りは流れました。

『おゝジャンヌ、御身が整へた和睦を、猶一層神聖にしようと、牧師になつて來やつたか。』

『きのう戦場でみたあの恐ろしげな少女が、今日のこの可愛いらしいジャンヌであつたらうか？　なあ、御身は再びわしをこゝで見ると満足に思ひか。わしは御身の言葉に従つて、正しい道に踏みかへりましたぞ。』

『公爵様、あなたは此上このうへもないよいことを遊あそばされました。きのうの公爵様とは思はれぬほど、あなたのお眉まゆのあたりは、大さう霽はれぐくとしてみうけられます。』といひながらジャンヌはあたりを見廻し、『誰たれも彼かれも、みいんなこゝに集あつつて、楽しく嬉うれしさうに見えま

すのに、わたしがこゝにまゐります途中、一人の騎士が大さう凋たひれていらつしやるのをみうけました。』と意味ありさうにいふのでございました。

『わしが今日の恩恵に洩みづかれるほど、自ら罪深ふ思ひをるものがあるとな？』

『こゝへ呼びましても差支さしつかへないでございませうか、もうし公爵様、差支おつしやへないと仰言つて下さいませ。あなたのお恵めぐみが、残くまる限なく行き渡らせられるやうに――でも、心の底からのお許しでなかつたなら、それは何の役にもたちませぬ。喜びの杯さかづきに、憎しみの念が一滴したでも滴したりましたなら、その杯の喜びは消されてしまひませう。樂

しいこの今日のけふ日に、公爵様のお許しが叶かなはぬやうな、そんな恐ろしい罪があるのでございませうか！』

ブルゴンディ公は、思ひ當あたつたやうに胸を打つて言ひました。

『おゝ！ 御身が言葉はやうく會得あはされたわ！』

『ではお許し下さるのでございますか？——』

我事わがことのやうに喜び勇いさんだジャンヌは、扉を開いて小鳥のやうに姿を隠かくしたかと思ふと、おづくためらと躊躇ためらふヅ・シヤツテルの手をひいて再びはひつて來ました。

さすがに公爵はためらつて居られました。

『これジャンヌ、御身は何をわしに求められるぞ？』

『さればでございます。すべて人に君たるものは、寛仁くわんじんにして依怙えこの沙汰なく、來る者きたを拒むやうな、偏頗へんぱな心を持たせられてはなりません。あの蒼穹あをぞらがこの天地あめつちのいかなるはてをも蔽おうてゐるがやうに、また、太陽がその光線ひかりを世界の隅々すみずみに惜しまず、夜の露が場所を選えらまず一様に宿つて、凋しほれた草木を甦よみがへらすやうに、敵も味方も同じく御覽ぜられ、等しく恵みをかけさせ給ふのが、神のみこゝろに叶おこなひつた君主の行ことでございます。』

『なんと眞實なことを言葉巧たくみにいやるぞ！あゝわしはまた少女をとめが力に動かされましたわ——こりやヅ・シヤツテル、今こそわしはお前を許しますぞ！おゝわしをお抱たき！あゝ父上ちやうがみ靈たまよ、あな

たをそこなひ血を流した、この手を抱いだきましたとて、決して／＼お怒いかり下さるな！ おゝ汝、死の神よ、わが心の奥に日向ひなたの雪と消え去つた、あの恐ろしい復讐の誓ひを再びわしにかへすまいぞ！』

何一つとしてジャンヌの力によらないものはありませんでした。市街まちは敵の桎梏しつこくを免まぬか、ブルゴンディとの和睦は整へられ、今はただシャルルの戴冠式を残すばかりとなつたほど、佛蘭西の運命は一いっ轉てんしてゐました。

『ジャンヌよ、御身はこの二つの腕に迎へ切れぬほどの幸福こうふくを、朕に捧げてくれた。して御身は、朕が今誠意まごころをもつて沙汰するところの、御身の名譽を受取らなければならぬ、まづ跪ひざまづかれい！』

たいけん

シャルルはするりと帶劔をひきぬいて、足許に跪いたジャンヌの

あ

肩先に當てられました。『朕は今日から御身を最高の位に登せ、また

のぼ

ぢよみ

その遠い祖先にも、敍位の沙汰をいたすであらうぞ。以後御身が楯

かつまた

は、王章の百合の花にて飾られよ。且又、御身を出した幸福な村に

こうふく

えいだいめんそ

は、永代免租の恩恵を授けるであらうぞよ。あゝ、御身が名は末世

まつせ

まつだい

末代、わが佛蘭西國民に尊敬されるであらう！』

嚴かに仰せられて、劔を鞘に納められたシャルルは、何事かを思ひ出されたやうに、急にもの優しいお顔になつてみえました。『こりやジャンヌ、もしも朕が御身に相應しい配偶を與へようとすりや、快よう受けてくれであらうの？ まあ聞かれい、つひ此間まで、愛

の威力を嘲笑つてゐたあの頑固なデユノアが、御身の力に溶かされあざわら
て、是非とも妻にと、卒直そつちよくにも朕に裁可さいかを願ひ居つたわ。をなあアニ
エ・ゾレエなんと似合にあはしい縁えはしではないか？』

『おゝ！驚かれる少女の力でございますこと。それもそれならこれ
もこれ、わたしの推量に違ひがなければ、あの、ラ・ヒイルどのに
も、この頃大さう心を悩なやまして居をられる様子にみうけられました。』
『なに？ ラ・ヒイルも亦、ジャンヌを求めて居ゐやるだと？ 勇氣
も似、戦場の名譽も等しい二人の英雄が、互に心を戦はさねばなら
ぬのか。あゝジャンヌ、こゝはどうでも御身が心一つに決めなけれ
ばならぬぞよ。』

『お待ちなさいませ。おゝジャンヌはあのやうに頬ほを染めて居られます。必きつと心みだも亂れて居るのでございませう。女子をなごは女子同志、こゝはどうぞわたくしにお委まかせ下さいませ。』

不思議な運命がジャンヌの上にふりかゝらうとしてゐました。先さつ刻きから人々の言葉のまゝに委まかせて、縫はれたやうに口を噤つぶんでゐたジャンヌは、シャルルが今しも席たを起たれようとした時に、初めてきつとその顔を振り上げました。

『陛下、暫くお待ち下さいませ。思はずわたしの面おもてが赤らみましたのは、決して娘氣むすめぎのうら耻はづかしさからではございませぬ。わたくしの胸には、ひとに話すのを憚はにかるやうな、そんな秘密は少しもございま

せぬ。陛下の大御心を注がせられ、また貴い騎士の方々が、わたくし如きものにとやかう仰言つて下さいますのは、この上もない名譽ではございますけれど、地上の榮華に耽らうために、羊小屋を捨ててこゝにはまゐりませぬ。またこの髪のに、結婚の花環を飾らうと、甲冑に身を固めませぬ。わたしが此所にまゐりましたのは、天の神から授けられました、わたくしの使命を果さうために外なりませぬ。わたしは神の選ませ給ふた少女、決してこの世の人の妻となるものではございませぬ。』

ジャンヌの聲は少しく怒りに慄へて、疳高く響きました。その顔は、使命を侮られた興奮のために、血がさしてゐました。

大僧正は言葉をはさんで、『いや／＼、總そうじて女は、人の妻となら

うために生れて來たのでありますぞ。その自然の法則に従ふのが、

即ち天命に服すとはいふもののちや。御身も尊たうといその使命をしと

げられた曉あかつきには、いかめしいその鎧兜よろひかぶとをすてゝ、もとの優しい女

子にかへらなければなりません。』

『大僧正様、この戦さが終わりました時、神様はどのやうなお告げを

わたしに下さいますか、今からは申上げかねますが、わたしはたゞ、

神様のみ言葉のまゝに従ふばかりでございます。あゝ、それよりも

わたしは、早く大事な任務をしとげなければなりません。陛下のお

額ひたひに、まだ王冠いたじを戴かせられず、おん頭かしらに聖きよい油はまだ注がせ

られないのでございます。――あゝ、陛下には、まだ眞實ほんとうの國王こくわうではいらせられませぬ。』

『おゝ、ライムへ進軍の用意はとうに整つて居るぞ。』

『少しも猶豫いうよ遊ばしますな、たとひ英軍群むらがり來つて、おん行手ゆくてを阻はじみますとも、神をの少女は道を開いて、たやすく陛下をお導き申すでございます。』

「御身が言葉はすべてみな聖靈せいれいの宣のたまはすみ聲こゑ、この世の愛は今御身が胸の奥深く秘められてあつても、平和が再び人々の胸にかへつて來た時には、神ばかりが占しめた御身の心にも、地上の人の情が芽ぐむであらうよ。その時こそは朕が好意も、うるはしい實みを結ぶであ

らう。」

『では、陛下には、まだこのジャンヌをたゞ尋常よのつねの女と卑いやしめられるのでございますか。奇蹟きせきはあのやうにさまぐあら現はれましても、猶なほわたしをたゞの女と御思召おぼしめしなさるのでございますか。あゝ、たゞの婦女子をんなが、何をもの好きに戦いくさを好み、鎧兜よろひかぶとに身を固めて、男の中に交まじはりませうか。この二つの腕に神の授け給さづふた劔つるぎを揮ふるひながら、心の中には愚かしい情を抱かかりましたなら、どのやうにまあ淺猿あさましいことでございますか？ わたしのこの體からだに宿らせ給ふ、尊い聖靈を怒いからせ、その神聖を汚けがすやうなことは、もう／＼決して御意ごいなさいますな。』

ジャンヌはきつぱりと言ひ切りながら、よど澱んだそこの空氣に堪へかねたやうに聲を高め、『陛下！進軍の喇叭ラッパを吹かれるやう御命令下さいませ。あゝ、この静かさこそわたしをひどく苦しめます。わたしの任務つとめは先を急ぐのでございます。』

この時一人の騎士が、慌あはたじしくはひつて來て、『敵はたゞ今マルネ河を渡つて進行中でございます。』と注進ちゆうしんしました。

みるくうちに、ジャンヌの顔は生々いきくと輝き渡り、細胞さいはうといふ細胞にみちくた活氣くわつきは、いかにも神が操あやつるものゝやうな感じを人々に與あたへました。

『さあ！ 戦ひませう、方々、戦鬪準備は整ひました！』といふよ

り早く、一散いつさんに表をおもてさして驅け出しました・

『續つづけラ・ヒイル、ライムの市の入口に、王冠のため最後の奮闘を

試こころみようぞ！　ヂュノア、少女につゞいて力を合あはされい！　して公

爵には、いやなに、決して卿を強おんみいるわけではないが、過ぎ去つた
過失あやまちを償つぐなふ時は今でありませうぞ。』

『仰おほせまでもござりませぬ！』

『アニエ・ゾレエよ、暫しばしの間ぞ、さらば！』國王自ら陣頭ラツバに立つ
て、名譽みちの途に進まれようとする勇ましき、進軍ラツバの喇叭はげは烈しく吹
奏されて人々の血を沸わかし、流れるやうに起おこつた軍樂ぐんかくの音は、やが
て堰せかれて荒々しく、人々の胸の勇氣と活氣をそゝつてゐました。

【入力者注】（頁行は底本のもの）

116-3 ズ・シャツテルの後姿 ↓ ズ・シャツテルの後姿

135-2 空氣に堪へかぬたやうに ↓ 空氣に堪へかぬたやうに

公開：令和三(2021)年八月二九日

改訂：令和五(2023)年三月七日